

さやえんどう（普通）

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型												
秋まき												
春まき												

栽培の特徴とポイント

生育適温は 15 ~ 20 で、28 を超えると開花、結実を妨げ減収する。根が深くまで伸びるため土壌の乾燥には強い。しかし、停滞水には極めて弱く、高地温時に排水不良になると枯れ上り、病気の発生が見られる。このため、水田転換畑では高畝にする必要がある。連作障害が発生しやすいことから、3~5年に1回の輪作が望ましい。越冬率を上げるために、早播きは避ける。

品 種

- 三十日絹莢 : 莢の表面にシワがなく柔らかいため、市場性が高い。耐寒性が強いいため、秋播きに向く。
 (ヤマト) 草丈 1.5~1.6m。
 スナック : 青実を肥大させて莢ごと利用するスナック系品種の1つであり、近年栽培が増加している。
 (サカタ) 耐寒性が中程度のため春播きに向く。草丈 1.6~2.0m。
 早生あさか : 分枝数が8本程度で、低節位から開花するので早く収穫できる。耐寒性が強いいため秋播きに向く。
 (トーホク) 草丈 1.9m。

栽培管理

1 畑の準備

3年以上えんどうを栽培していない、排水のよいほ場を選ぶ。酸素要求量が高く、深く根を張るため、耕起の際は深耕を心がける。

2 施肥(施肥例参照)

根粒菌が着生するので、窒素施肥は少なめに行う。また、酸性を嫌うので、pH 6以上を目安に石灰を施用する。基肥は、まず堆肥、苦土石灰を施し深耕する。その後、高度化成、重焼燐を施用し畝立てする。基肥主体であるが、着莢する頃に、速効性化成を追肥することで莢重、草丈が増加し多収となる。秋播きでは融雪後、1回目の追肥を行い、開花期に2回目の追肥を、春播きでは、草丈 10~20cm 頃に1回行う。

施肥例 (kg / 10a)

肥料名	秋播き			成分			春播き			成分		
	基肥	追肥(1回目)	追肥(2回目)	N	P	K	基肥	追肥	N	P	K	
完熟堆肥	2000						2000					
苦土石灰	180						180					
そさい3号	40			6	6	6	60		9	9	9	
燐加安S540		20	20	6	5.6	4		20	3	2.8	2	
合計				12	11.6	10			12	11.8	11	

3 播種

1 箇所に3～4粒播種し、軽く覆土し鎮圧する。種子の必要量は10a当たり秋播きで、4～5リットル、春播きで6～8リットルである。秋播きの場合、年内の生育が本葉5枚以上となると越冬率が低下するので、播種してから1週間後に再度隣接して播種する。春播きでは、融雪が遅れ、3月上中旬の播種が不可能になる場合がある。その場合は、育苗した苗を平均気温が5℃程度になってから定植する。

4 栽植密度

秋播き：畝幅150～180cm×株間50cm×2条

春播き：畝幅150～180cm×株間20cm×2条

5 マルチ

秋播き栽培では、地温確保、畝の過湿防止、融雪後の雑草抑制のために、黒色マルチを用いる。

6 排水対策

融雪後の停滞水は腐敗の原因となるため、秋播きでは、年内に排水溝を整備する。

7 間引き

草丈が7～8cmになったら1カ所2本立てになるように間引きをする。秋播きでは、融雪後に間引きする。

8 支柱立てと誘引

巻きひげが出てくる前（本葉4～5枚）に、品種の特性に合せた長さの支柱を畝の真ん中に2～3m間隔で立て、ネットを張る。スナップ系ではつるが離れやすいので、ポリテープ等をつるをネットに誘引する。

9 整枝

枝が多く発生し過繁茂になると、過湿や光不足となり、病気が発生しやすく、減収の原因となる。秋播きの場合、主枝及び第1次分枝を利用する。第2次分枝は開花しても結実しないことが多いので早めに除去する。春播きの場合、生育期間が短く分枝数も少ないため整枝しない。

病虫害防除

立枯病：連作ほ場で発生しやすい。連作を避け、やむなく連作する場合は必ず土壌消毒をする。

灰色カビ病：高湿度になると発生しやすい。整枝により風通しをよくする必要がある。

褐斑病：畑が過湿となったときに発生するので排水を良くし、薬剤散布により発生を抑える。

主要害虫はハスモンヨトウ、ナメグリバエ、アザミウマ、ハダニ類である。薬剤により防除を行う。

収穫

開花後15～25日で収穫となる。収穫適期は絹莢では、豆のふくらみが目立たない時期、スナップ系では、粒が十分肥大した時期である。大きさや品質を揃えるように収穫する。品質保持のため、収穫は早朝に行い、直射日光に当たらないように注意する。

販売のポイント

収穫時に、花びらや病害莢・障害莢が混入しないように注意する。